

本年5月、キリスト教関係の月刊誌「いのちのことば」の特集『寄り添うということ』のなかに、本会副理事長であり、社会福祉法人ミッションからしだね理事長である坂岡隆司さんの福祉の仕事への思いが紹介されました。つづいて、6月、「クリスチャン新聞」には、一般社団法人『キリスト者協働の家・湖風館』オープン（滋賀県大津市、理事長坂岡隆司氏）の記事が掲載されました。上記2つの記事を本号に転載させていただけることになりましたので、坂岡さんの活動の一部としてご紹介いたします。

「社会福祉法人ミッションからしだね」は、京都市山科区にある「からしだね館」をNPO法人CIFジャパンの事務所として使用することを認めてくださっており、坂岡さんは、その多忙なお仕事のかたわらCIFジャパンあてのメール、電話の連絡事務、郵便、ホームページ管理のための便宜供与などに協力して下さっております。また、CIFジャパン副理事長として、国際研修応募者の面接などさまざまな活動に尽力しておられます。（浅野記）



坂岡 隆司
社会福祉法人ミッションからしだね 理事長
1987 クリーブランド

「寄り添う」ということ 日々、迷い悩みながら

福祉の仕事をしてながら、「寄り添う」ことにこんなにも近く、かつ遠い世界はないのではないかと思います。私たちの「からしだね館」は、地域で暮らす精神障害者の自立や就労を支援する施設なのですが、果たしてどういう支援がその方の自立や回復につながるものなのか、日々迷い悩みながら自問自答を繰り返しているのが実情です。毎日の朝礼でも「人のいたみや弱さに寄り添うことのできる、あたたかな援助者としてください」と職員皆で祈るのですが、ではその寄り添うとはいったいどういうことなのか、必ずしもわかっているわけではありません。

これはわが職場のワーカーの体験談です。彼女は数年前、癌で母親を亡くしたのですが、付き添っているときに、時々死期についての話になったそうです。福祉のプロとして常に学んでいるはずなのに、まともに母に答えられずオロオロするばかりだった、ひどい娘だったと彼女は告白していました。もうひとつ、これは親しくしているある牧師の話です。むかし学生の頃、訓練に耐えられず行き詰って、とうとう寮を逃げ出してひと夏を母教会で過ごした。恩師である婦人宣教師は、そういう自分をただ黙って受け入れてくれた。何も言わず何も訊かれなかった。それでも夏が終わるころ、自分はもう一度神学校に帰って行くことができた。ざっとそんなお話でした。

これらのエピソードを聞きながら、「寄り添う」とは実はそういうことなのでは、と思っています。それは、必ずしも何か具体的に手を差し伸べることではないかもしれませんが、また教えることでも導くことでも、あるいは助けるということでもないのかもしれませんが。

オロオロしながら母のそばに立ち続ける娘。神学校から逃げ帰ってきた青年を黙って迎え入れる婦人宣教師。彼らは、ただその人の傍にたたずんでいるだけです。でもその心は痛いほど愛する者たちに向かっています。その気配が、人に安心を与えたり、もういちど自分自身に向き合うことをさせたりするのではないかと考えるのです。

正直なところ、障害をもった方々を支援するという仕事をしながらつくづく思うことは、人間の複雑さや生きることの難しさ、そして支援者の無力です。そうした限界をわきまえつつ、あえて隣人の傍らに立ち続けること、それが寄り添うということなのかなと思っています。

2012年3月15日

（いのちのことば5月号より転載、滋賀県在住）

社会福祉法人ミッションからしだねは、精神障害や心の病を抱えながら地域で暮らす人びとの支援を目的として、2006年6月京都市山科区に「からしだね館」を開設。からしだねセンター（相談・交流）、からしだねワークス（就労訓練、就労の場）を運営。カフェ・ライアングル（からしだね館1階）では、食事・喫茶のほか団体への貸切利用も提供している。（からしだね通信より）

（クリスチャン新聞 2012年6月24日号より転載）